



TITLE:

# 唐代の蔬菜生産と經營

AUTHOR(S):

大澤, 正昭

---

CITATION:

大澤, 正昭. 唐代の蔬菜生産と經營. 東洋史研究 1984, 42(4): 567-594

ISSUE DATE:

1984-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153928>

RIGHT:

# 東洋史研究

第四十二卷 第四號 昭和五十九年三月發行

## 唐代の蔬菜生産と經營

大澤正昭

はじめに

一 「園宅地」について

(一) 小説に描かれた「園宅地」

(二) 田令に規定された「園宅地」

(三) 近郊農業の發展

二 蔬菜栽培技術の發展段階

(一) 品種

(二) 一般的栽培技術

(三) 肥料

三 蔬菜生産と農業經營

おわりに

## はじめに

われわれはこれまで、唐代の畑作（主穀作）<sup>(1)</sup>及び水稻作を考察することによって、當時の生産力發展段階を分析し、さらに農業經營の歴史的存在形態をも考えてきた。それは、とりもなおさず、中國における小經營の發展を見通すための基礎作業であつた。<sup>(2)</sup>しかし、各段階における生産力と小經營の再生産構造をとらえるためには、さらにいくつかの要因をとり入れる必要があること多言を要しない。そこで小論では、從來ほとんど注目されることのなかつた唐代の蔬菜類生産について考えてみたい。それは、言うまでもなく、唐代における農業生産力發展を把握するための重要な要因であり、また、日常不可欠の食品としての蔬菜類の生産は、小經營の再生産維持とも深く関わっているからである。そしてさらに、蔬菜類の生産は、都市におけるその需要に典型的に見られる如く、貨幣經濟とも密接な關係を持っていた。それ故、小經營と貨幣經濟との關連を探る上で、貴重な素材をも提供してくれるのである。このような視點から、以下唐代における蔬菜類生産及び經營との關わりについて検討してゆきたい。

ところで、その検討のための史料は決して多くはない。かつて主穀作を考察した際と同様、斷片的史料を總合してゆくことが必要となる。ただ、この問題では小説類にもいくつかの興味深い材料を見出すことができるので、それらをも積極的に活用してみたいと考える。無論、小説類を使用するに當つては、前にも觸れたことがあるが、<sup>(3)</sup>その有効性と共に限界にも注意しておく必要がある。われわれは、この點も考慮しつつ、以下の論を進めてゆきたいと考える。

## 一 「園宅地」について

われわれは、唐代の蔬菜生産に關わる史料を概觀する時、二つの性格の史料があることに氣がつく。一つは所謂「園宅地」での蔬菜栽培に關するものであり、いま一つは蔬菜栽培専門の經營をめぐるものである。勿論、蔬菜はこれらの他、

主穀類と共に一般の耕地で生産されることもあったであろうが、その状況を示す史料はほとんど残されていない。しかし後述するように、前記兩者のみを検討することによっても、多くの問題を考察することが可能なのである。従って小論ではとりあえずこの二側面からの考察を進め、そこから唐代の蔬菜生産について考えてゆきたいのである。

まず、「園宅地」における蔬菜栽培について見よう。それは小經營にとって主要な生産の形態ではないが、その再生産維持のためには不可欠の要素であろう。では「園宅地」とはどのような存在であり、その歴史的な位置づけはどのような変化していったであろうか。その形態を概観することからはじめよう。

# (一) 小説に描かれた「園宅地」

「園宅地」の形態を概観するためには、小説類がその有効な素材となる。まず、小説の舞臺として描かれたものを中心にとりあげてみよう。

「園宅地」には、庭園の如き觀賞用の植物を植えている部分も勿論あるが、生活に資するための作物もかなり多く栽培されていた。そのなかでは、衣料用作物としての桑が目立っている。いくつかの例を断片的に引いてみれば、「後園中の一桑樹の下に」<sup>(5)</sup>とか、「宅後の桑林に於いて」<sup>(6)</sup>など物語の一背景として描かれている。また、『朝野僉載』の著者張鷟の故宅には、高さ四、五丈に及ぶ桑の木があったともいう。このように桑の木は廣く「園宅地」の中に植えられていた。ちなみに、當時の桑は、現在栽培されているようなたけの低いものではなかったし、「園宅地」以外の一般的耕地でも栽培されていたことは言うまでもない。これらたけの高い桑はしばしば小説にも登場しているのである。<sup>(8)</sup>

桑の他、食用になる果樹や、筍もとれる竹があった。『酉陽雜俎』の著者段成式の修行里の宅には數畝の果園があった<sup>(9)</sup>というし、梁生なる者の別荘では後園に梨の木が十餘株あったという。<sup>(10)</sup>かくて小説の背景としても「園中の櫻桃熟す」<sup>(11)</sup>とか、「皆宅後の竹林中に走り入りて没す」<sup>(12)</sup>等と觸れられているのである。果樹について言えば、實際、都市内においても

廣く栽培されていたようで、洛陽の陸仁坊の柿、嘉慶坊の李、或いは崇讓坊の大竹と桃などは著名な産物となっていた程であった。<sup>(13)</sup>

では蔬菜についてはどうであろうか。北魏杜子休の宅では、園中に果樹・蔬菜・樹木が繁茂していたという如く、<sup>(14)</sup>一般に園中で蔬菜がつくられていた。このように蔬菜が栽培されていたのは、より以前からのことであり、小説では晉の趙貞の家園の葱の話などもある。<sup>(15)</sup> 同様に、唐代では、婺州の僧の家園に植えられていた蔓菁<sup>かぶ</sup>の話、<sup>(16)</sup> 或いは、寺の園で蔬菜が栽培され、井戸から「水車」によって水を汲みあげ灌いでいた様子などが描かれている。さらに、寶父なる者が長安の小さな宅を買とり、そこを恐らく菜園として耕したという話も傳えられている。<sup>(18)</sup>

かように見てくる時、われわれは遅くとも晉代以降の「園宅地」には、桑・果樹・竹があり、菜園が設けられていた様子を窺うことができるのである。その他、宅に附屬しては、農耕・運搬用の牛・馬・驢等があり、食用の豚・雞等も飼育されていた。<sup>(19)</sup> かかる「園宅地」の概念は、北周の「六條詔書」において「地の利を盡す」ための一方策として、桑・果樹・蔬菜を植え、雞・豚を育てよと勧められている所と共通するものであった。<sup>(20)</sup>

次いで、「園宅地」と關連して注目しておきたいのは、宅と密着して描かれた堆肥の存在である。「華州參軍」と題する物語では、崔氏の娘が長安崇義里の宅から「糞堆」を踏み臺として垣を乗り越え、逃げてゆく場面があるし、<sup>(21)</sup> 「崔無隱」なる物語では、農家の中門の外に「糞積」があり、そこに上って垣の中を覗<sup>うかが</sup>ったという場面がある。<sup>(22)</sup> また、「蘇丕の女」という話では、李氏の宅の「糞土中」に「桃符」が埋められていた。<sup>(23)</sup> そして、ここでは、誇張もあるうが、七、八尺の深さまで掘るのに百餘人の勞働力が必要だったといわれるので、「園宅地」に堆肥を製造する場所があり、その規模はかなりの大きなものだったことが豫想されるのである。このように、宅に密接して堆肥が存在したのであり、蔬菜や果樹に對する施肥の問題と關連して注目しておきたいのである（後述）。

さて、以上が唐代に至るまでの「園宅地」の形態であった。ここでその特徴的な點をまとめておこう。まず、ここに見

る限り、「園宅地」の基本的な形態は、少くとも晉・南北朝から唐代に至るまでほとんど變化していない。さらに、長安・洛陽などの都市部と農村部との間にも格別の差異を見出すことはできないのである。では、この期間、「園宅地」は何等歴史的變化も蒙らず、また、都市部と農村部との間にも格差は生じなかったものであろうか。

この問題を考えるためには、その史料の内容について注意しておかねばならない。つまり前掲諸史料は、富有な階層に屬する人々を主人公とする傳奇小説が主體であつた。周知の通り、傳奇小説が小農民を題材とすることも多かつたが、廣い「園宅地」が背景となるような小説では、小農民はほとんど登場する餘地がなかつたのである。従つて、「園宅地」の歴史的變化も、都市と農村との格差も表面には出てこなかつたと考えられる。しかし、その基本的形態は十分確認できるであらう。われわれはこの點をふまえた上で、さらに視野を擴げてゆく必要があると考える。

では、小農民も含めたより一般的な「園宅地」とはどのようなものであつただらうか。それを考える際、有力な手懸りとなるのは、田令の中の「園宅地」に關する規定である。所謂律令體制の下にあっては、田令はかなり普遍的な概念を提示してくれると考えられる。他により詳細な史料が期待できない現在、この規定を検討することは十分意義のあることである。

## (一) 田令に規定された「園宅地」

律令體制下において、一般農民に支給される土地は二種類に分けられる。それは言うまでもなく、唐の永業・口分田の如き主穀類を栽培する耕地と、以下に見る「園宅地」とである。これらは王朝によつて規定が變更られており、前者については多くの研究が蓄積されている。しかし、後者については、曾我部靜雄・土肥義和氏等の專論があるだけである。<sup>(25)</sup>それ故ここでは北魏以來の規定を確認する事から始めよう。

〔北魏〕 諸そ民の新居を有する者は、三口に地一畝を給し、以て居室と爲せ。奴婢は五口に一畝を給せ。男女十五以上、

其の地分に因り、口ごとに菜を種うること五分畝の一を課せ。<sup>(26)</sup>

〔北周〕 凡そ人口十已上は宅五畝、口九已上は宅四畝、口五已下は宅三畝とせよ。<sup>(27)</sup>

〔隋〕 其れ園宅は、率ね三口に一畝を給せ。奴婢は則ち五口に一畝を給せ。<sup>(28)</sup>

〔唐〕 凡そ天下の百姓の園宅地を給する者は、良口は三人已上に一畝を給し、三口ごとに一畝を加えよ。賤口は五人に一畝を給し、五口ごとに一畝を加えよ。其の口分・永業はこれに與<sup>あう</sup>られ。<sup>(29)</sup>

京城及び州縣郭下の園宅の若きは此の例にはあらず。

さて、われわれはこれらの條文を通觀する時、いくつかの點に氣が付く。それらをあげてみよう。

まず、居住地用として與えられる土地（園宅地）は、北周令を除けば、支給面積が一定していた。良民は三人に一畝、賤民は五人に一畝という面積が支給されるのであり、この點北魏令が繼承されていると見てよい。つまり、少くとも北魏以來、居住地とその周圍の土地の適正規模に對する考え方は變化していなかった。

このことは、規定上の表現は變化しても、その内實は同一であつたことを示す。換言すれば、「居室」の地や「宅」という表現にも「園」の概念は含まれていたのである。かかる「宅」の一般的用例としては、梁代に「半頃<sup>(30)</sup>の田、以て税を輸すに足り、五畝の宅、以て桑・麻を樹<sup>う</sup>う」というものがある。勿論、この用例は孟子の「宅」の概念、即ち「五畝の宅、之に樹うるに桑を以てすれば、五十なる者、以て帛を衣るべし<sup>(31)</sup>」という概念をふまえたものである。しかし、當時はまだ實態としてもこの「宅」の概念は有效だつたであらう。その後、語の意味をより明確にするため「園」が附加えられ、實際的用法にも耐え得る條文として整備されていったと考えられる。

同時に、この園では桑・麻などの衣料作物のみならず、蔬菜も栽培されたことは、北魏の規定から窺えるところである。このように、前節に見たような「園宅地」の概念はかなり一般的なものとして通用していた。

次にもう一點注目しておきたい點がある。それは、ここに掲げた唐令は『唐六典』所載のものであるが、そこでは「州

縣郭下」即ち都市内における場合は例外であるとする注がつけ加えられている點である。この注は、『通典』等所載の「開元二十五年令」では本文とされている。しかし、主に「開元七（或いは四）年令」に據ると見られている『唐六典』では、明らかに注となっていた。つまり、開元初までの田令本文では都市も農村も同一の基準で考えられていたものが、開元末には都市を例外とする一條が必要となったのである。都市内の「園宅地」規定が、もはや現實に合致しなくなっていたのである。

かくて、開元年間に至るまでの都市の發達は「園宅地」の規定通りの支給を困難にしていた。それは主に都市人口の増加とそれに伴う土地不足によるであらう。事實、長安の中心部では土地は貴重なものであった。魏徵の大邸宅は、憲宗の時までに九家に分割されてしまったし、<sup>(32)</sup>小説では、長安の繁華街に鄰接する低濕地を埋めたてて邸店を造り、巨利を博したという話もある。<sup>(34)</sup>とまれ、遅くとも唐中期以降、舊來の「園宅地」は變革を餘儀なくされていた。ここにその時間的變遷の一端を窺い知ることができるのである。

ところで、以上に見た規定は、前節に述べた如き富有な階層のみならず、一般の農民をも對象にしていることは言うまでもない。とすれば、國家の側から見た農民とは、「園宅地」を支給され、そこで蔬菜類をはじめとする日常的必需品を自給する存在となっていた。換言すれば、田令の立場は、永業・口分田と園宅地とにより、諸負擔も含めた基本的再生産が可能であるとする立場なのである。そしてそこでは、寛郷・狹郷の違いは認めるものの、都市・農村という基準で見れば、同一に捉えられていた。しかし、唐代中期までに顯在化した都市問題は、かかる立場に修正を迫り、その結果、都市に對する追加規定が設けられることとなったのである。

では、都市の「園宅地」は、具體的にはどのように變化しつつあったのであろうか。その詳細は今のところ把握し難い。ただ考えられることは、蔬菜等「園」に関わる生産物が別途供給されるならば、その機能を分離してゆくことは可能だということである。つまり、都市などの土地が不足する條件の下では、「園宅」を一體として支給する必要は必ずしも



ない、或いはなくなりつつあった、と考えられるのである。とするならば、かかる「園」「宅」の分離という流れを確認するためには、當時の近郊農業發展の相について検討しておくことが、必然的にもとめられることとなる。

### (三) 近郊農業の發展

最近、余華青氏は秦漢時代における「園圃業」の發展についての研究を發表され、この時代を發展の一畫期とされている。<sup>(36)</sup>確かに秦漢時代の「園圃業」即ち蔬菜・果樹栽培業は、都市近郊を主として發展していたこと、余氏の指摘される通りである。そして、以後この水準を繼承する形で發展を續けるわけであるが、近郊農業としての蔬菜・果樹栽培が一層の飛躍を遂げたのは、やはり唐代である。その栽培技術的側面については次章で述べるとして、ここではその概観だけをしておこう。

まず、唐代には蔬菜の一大生産地が都市に鄰接して形成されていた。その典型例は長安に見ることができる。即ち、「興善寺より以南の四坊、東西は郭に盡くるまで、時に居者ありと雖も、煙火接せず、耕墾種植し、阡陌相連ぬ」と述べられる如く、<sup>(36)</sup>長安城内の南部は都市というよりは全くの耕地となっていた。そしてこの耕地では蔬菜が作られていたのがあった。小説史料によれば、大暦年間の物語の舞臺に「蘭陵坊西の大菜園」という記述が見られ、<sup>(37)</sup>當時、長安城南部では大規模に蔬菜が栽培されていた様子を窺わせるのである。このような長安の状況は、南宋の都臨安で「諺に云く、東門の菜、西門の水、南門の柴、北門の米、と。蓋し、東門は絶えて民居なし。彌望するに皆菜園なり」と言われた状況と極めて類似している。大都市近郊における蔬菜栽培業は、唐代にすでにかなりの發展を示していたのである。

かかる蔬菜・果樹など商品作物の栽培は都市内外で盛んに行なわれており、小説にはそのような状況が如實に反映されている。例えば、裴明禮なる人物は、長安金光門外の不毛の地を買とり、そこに牧羊者を宿泊させた。そして羊の糞が多く堆積したところで果樹の種子を播き、果實を收穫した。それを城内に運搬・販賣して巨利を得たのであった。さらに

彼は大邸宅を構え、その周囲で養蜂をも行ない成功したといふのである。<sup>(39)</sup> このように、長安という一大消費地を背景に、商品作物としての果樹を栽培して財を成したといふ物語は、當時の近郊農業の魅力語り盡くしていると言えるであらう。同様に、郭橐駝なる園藝職人の物語でも、彼の秀れた技術を求めたのは、長安の「豪富の人」で「觀游及び賣果を爲す者」であつたとされているので、果樹の栽培によって「豪富」となった者が相當數あつたことを窺わせるに十分である。

かかる近郊農業は、長安の如き大都市周辺においてのみ發達したわけではない。その狀況は、地方の都市を背景にした小説からも窺うことができるのである。例えば、滑州の城郭の南には「灌園」<sup>(42)</sup>を業とする夫婦が居たし、徐州から五里の瓜園では、神仙がひそかに傭作をしていた。また、平陰に「園叟」<sup>(43)</sup>が居たことは、そこで「園圃業」が行なわれていたことを示す。さらに、「宋城南店」の「菜市」<sup>(44)</sup>に來る老婆の物語も、地方での蔬菜栽培業の展開を語っているのである。

以上に見た如く、唐代にあっては近郊農業は大きな發展を遂げていた。それも大都市に限らず、中小都市においても同様だったのである。とすれば、前節までに見たような「園」の機能は十分代替され得るのであり、その「宅」との分離は必然的に保障されている。そして、この分離は、かなり廣汎な地域で可能となりつつあつたことも、われわれは十分豫測できるのである。かくて一般的な「園宅地」は、時間的・空間的な發展の過程を表明することとなつた。

では、このような「園」と「宅」の分離を推し進める要因は、いわば外的要因としての都市の發達のみであらうか。ここでわれわれは、内的要因として蔬菜生産力の發展という側面に目を轉じなければならない。それこそが蔬菜の流通を活潑にし、そこに小經營農民をまきこんでゆくことによつて「園」・「宅」の分離を推進する大きな要因だったのである。章を改めよう。

## 二 蔬菜栽培技術の發展段階

ここでは蔬菜栽培技術の發展の内容を、品種・一般的栽培技術・肥料の三つの側面から検討してゆく。

### (一) 品種

中尾佐助氏によれば、中國の傳統的蔬菜は西アジアからの導入植物が主體であり、小麥などと共に傳來したものが多くとされる。<sup>(45)</sup> 確かに、本草書や農書を読んでゆく時、多くの蔬菜が漢代以後に登場し、南北朝の分裂時代を経て唐代に至る過程で定着していった感がある。それは傳來から普及・定着或いは改良という過程を示すものであろう。その結果、唐代の本草書には品種の特性が整理され、農書には栽培法その他がまとめられることとなる。前者では唐初に編纂された『新修本草』が代表的であるし、後者では『齊民要術』を繼承した『四時纂要』(以下『要術』・『纂要』と略稱)がある。本節では、これらの諸史料に主に依據しつつ、唐代までの蔬菜品種明確化の過程について、その概略を考察しておこう。

ただ、ここでは蔬菜のあらゆる品種についてとりあげるだけの餘裕も能力も、勿論ない。その典型例として、十字花科のカブ・ダイコン・ツケナなど<sup>(46)</sup>について考察し、唐代に至る品種明確化過程の一端を垣間見たいと考える。

さて、十字花科の蔬菜は、西方傳來種が大部分であるため、中國における栽培の歴史も比較的淺く、また、論ずるまでもなくその形態も似ている。このため、漢代頃には、それらの區別は未だあいまいだった。揚雄の『方言』では、蕪菁の方言として、薺・薺・大芥があり、その小さいものは、辛芥・幽芥、紫の華をつけるものは蘆菔・菹遠と稱されていた<sup>(47)</sup>という。このように、後にはカブ・ダイコン・カラシナ・ツケナなどと區別されるようになる蔬菜が、同一品種の方言として理解されていたのである。無論、當時は未だ品種改良も進んでいなかったであろうから、その區別が不十分であったことは首肯できるところであり、以後、徐々に區別は明確化されてゆく。とは言え、晉の郭璞にあっては、漢代と餘り變る

所はなかった。つまり、江東では薺を菰とよび、蘆朮を溫菰とよぶという註を『方言』に附している位のものであった(48)し、また、蘆朮は蕪菁の屬であると考えていた。(49)これが梁の陶弘景になると、それらの相違はやや意識に上ってきたよう(50)で「蘆朮は是れ今の溫菰なり。……蕪菁根は乃ち溫菰より細く、葉は菰に似たり」と記すように、ダイコンとカブの區別を考へはじめている。かかる區別が明確になるのは『要術』であったが、さらに詳しくは『新修本草』においてであった。そこでは項目として、傳統的な「蕪菁及蘆朮」の項とは別に「萊菔根」の項をたてているし、前者の説明の中では「蕪菁、北人又蔓菁と名づく。根・葉及び子は乃ち是れ菰の類にして、蘆朮とは全く別なり。體用に至るも亦殊なれり」として、同一項目におくことさえ暗に批判している。そして、從來これらが混同されたのは「江表」では、この兩者共に生産されることがなかったからであるとも指摘している。(52)このように、唐初までには、カブとダイコンの明確な區別が行なえるようになっていたのであった。それは一つに、隋・唐の統一によって、全國的な品種の比較・交流が可能になったという事情もあるであろうが、また、品種改良も進み、各品種の特性が明瞭になったことにもよるであろう。

かくて、カブ・ダイコンは普及してゆくが、殊にダイコンは一般的食料として重要な蔬菜となつていった。隋の張威が家奴を使って民間で「蘆朮根」を販賣させたという話などは、ダイコンの普及の一面を窺わせる。(53)また、唐の營田規定の中にも、大麥・蕎麥と並んで「乾蘿蔔」があり、それが主要な收穫物の一つとなつていたことがわかるのである。さらにその食味についても普通に知られていた。それは、官僚のポストごとの性格をサンショウやダイコン・ショウガの味に譬えて述べた話の中に登場している。(55)その中で「殿中」は、ダイコンまたはショウガに譬えられているが、そのところは「辛辣と雖も思を爲さず」であるという。このような譬え話が通用するためには、誰しもが日常食べているものを題材としなければ意味がないのである。

次にカブとツケナ(菰)の區別である。これについては既に陶弘景が明確に區別しているが、唐代には地域的差異をふまえた説明が加えられている。つまり、菰を「北土」に植えてもその種を維持することはできず、また、蕪菁を南に植え

でも結果は同じだという。<sup>(56)</sup>このことは『食療本草』でも「北に菰菜なく、南に蕪菁なし」と記されているので、<sup>(57)</sup>唐代の一般的認識となっていた如くである。當時、カブとツケナは南北それぞれの風土に適合した品種として定着していたのである。しかし、かかる認識は宋代までに覆ってしまふ。宋代には「菰は南北皆これあり」<sup>(58)</sup>と言う如く、若干の特性の差は残しつつも、ツケナは全國的に栽培されるようになっていた。このような、唐・宋間における發達の具體相については明らかにし難いが、この間の品種の交流・改良や技術進歩の成果と考えることもあながち無理とは言えないであろう。ともあれ、漢代には區別の不明瞭であつた十字花科の蔬菜は、唐・宋期にはほぼ完全に區別され、生産されていた。

この他、幾種類かの作物でも區別が明確になされるようになったり、また、新たに傳來したと思われる作物もあるが、ここでとりあげるだけの餘裕はない。ただ、宋代に數多く編纂された本草書を、清代の『植物名實圖考』・『同長編』（吳其濬著）などと比較すれば、中國の蔬菜類の大部分は宋代までに揃つていることに氣附かせられる、という點だけを付け加えておきたい。

蔬菜品種の發達は概ねかくの如くであつたが、ではそれらの栽培技術はどのように發展していただであらうか。

## (一) 一般的栽培技術

唐代における蔬菜栽培の技術については、その詳細を知ることとは困難である。それは『要術』に匹敵するような農書が無いからである。ただ、個々の作物ごとではなく、蔬菜類總體として考える時、『纂要』が貴重な素材を提供してくれるので、これを手懸りとして見てゆこう。

さて、『纂要』と『要術』を比較しながら通觀して氣がつくことは、前者で、蔬菜類とその他の作物との記述に違いがあることである。つまり、前にも述べたことがあるが、<sup>(59)</sup>『纂要』の主穀類に關する記述は、一部分を除いてほぼ『要術』の抄録となつていた。しかし、蔬菜類については必ずしもそうはなつていないのである。個々の作物ごとに關係する記述

『要術』巻数	作物名	『纂要』の記述分類			
		I	II	III	IV
1	穀	○			
2	黍 稷 粱 秫 大豆 小豆 麻子 麥小 水稻 旱稻 胡麻 瓜子 瓠 芋 蘿蔔	○ なし ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○		○
3	葵 青 藋 蒜 薤 葱 韭 蜀芥・雲臺 胡 荽 蘭 香 荳 蓼 薑 薑 蒿 荳 苜 蓿	○  ○  ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○*	○
				暑 預* 午 莠 大 胡蘆	

\*『山居要術』

\*『山居要術』『地利經』

を集めてみれば、『要術』にはない記述がかなり多く含まれているし、また、『山居要術』・『地利經』など出典を明記した記述も蔬菜類に關して存在するのである。そこで、このような記述方式を確認するために作成したものが左表である。ここでは、各作物に關して、十二箇月に分散している『纂要』の記述を集め、それと『要術』の記述を比較してみた。<sup>(60)</sup>そして、その結果を次の四つの範疇に分類した。つまり、(I)は全文が『要術』の抄録であるもの、(II)『要術』の抄録とそこに含まれない記述が相半ばするもの、(III)は全文が『要術』に含まれないもの或いは他書によるもの、(IV)記述が少なすぎて分類不可能なもの、の四つである。これを『要術』巻一―三に記載された主穀類及び蔬菜類につき整理したのである。さて、この表を見ると、『纂要』の主穀類と蔬菜類との記述の間にはかなり明確な相違があることがわかる。即ち、主

穀類ではほとんどが(I)であるが、蔬菜類では、(I)と(II)(III)が相半ばしているのである。また、『要術』にはなかった署預など三種の作物もつけ加えられている。このような相違は、この表ではとりあげなかった果樹・樹木類には見られない。それらは主穀類と大差なく、ほとんど(I)なのであった。つまり『纂要』の栽培植物に關する記述では、蔬菜類だけが體裁を異にしていたのである。

では、このような事實は何を意味するのであろうか。考えられることは、當時、蔬菜類の栽培技術が、『要術』とはかなり違ったものになっていったという可能性である。もし、『要術』の技術水準がすべての作物において唐代の最高水準にあったとすれば、『纂要』の記述は、主穀類の如く『要術』の抄録で事足りたであらう。しかし、そうっていないのは事實であり、とすれば、『要術』以後『纂要』が書かれるまでの間に、蔬菜類の栽培技術のみが特に發展したと見なければならぬ。『要術』よりもすぐれた技術が出現し、普及しているならば、『纂要』はそれを當然とり入れなければならぬのである。かくて、『纂要』の記述は前表のような體裁になったと考えられる。

かかる技術水準の高度化があつたためであらうか、『纂要』では『要術』の區種法のみをとり上げている作物もある。茄子・瓠はそれであり、一般的栽培法と共にとり上げているのは瓜・冬瓜である。このように、『要術』で區種法について述べられている蔬菜は多くはないが、そのほとんどを『纂要』はとりあげているのである。ここにも、技術水準の高度化という當時の情勢が窺えるであらう。

ともあれ、われわれは『纂要』の編纂された唐末・五代までに總體的な蔬菜栽培技術の發展があつたであらうことを確認しておきたい。

### (三) 肥料

次に栽培技術の重要な一側面として、肥料殊に堆肥について見ておこう。

『纂要』にみる蔬菜と施肥

作物名	肥料
瓜瓠	糞、牛糞（共に區種法）
茄子	〃、〃（〃）
茄子	〃、〃（〃）
芋	〃、豆糞
蘿蔔	〃
葵	〃、熟糞、糞土
蔓菁	〃
蒜薹	〃
薤	〃、菹豆（綠肥）
葱	菹豆（綠肥）
韭	糞
薑	〃、蠶沙
薑	〃
荷蓐	〃
苜蓿	糞土、牛糞
大胡	油麻・菹豆・蒜、爛草、糞土
百合	雞糞
胡荽	熟糞、糞土
芥	糞
菜園一般	菹豆（綠肥）

さて、『纂要』の記述を見る時、蔬菜類に對して肥料が注意深く且つ多様に施されていたことは明らかである。確認のために、主穀・果樹・藥草などを除き、各作物ごとに使用される肥料をまとめれば左表のようになる。ここでは、基肥・追肥などの區別なく、用いられる肥料はすべて掲げている。

この表の特徴的な點は、牛糞・雞糞などその内容が明瞭な肥料の他、かなり多くの作物に對して「糞」とのみ記されていることである（「熟糞」・「糞土」等も同様であろう）。ではここにいう「糞」とは一體何なのか。『要術』では卷頭雜説に踏糞の法が述べられているので、「踏糞」＝厩肥を指すことが多いであろう。しかし、『纂要』の蔬菜栽培法は『要術』の抄録ばかりではなかったことに前に見た通りである。とすれば、われわれは他の肥料の可能性についても考慮しておかねばならない。そこで想起されるのは、前章に見た如く、宅のそばに積まれていた堆肥である。この堆肥は、踏み臺として利用されていたことから、かなり固く、一定の高さを持つものであった。とすれば、それは、人糞や泥土・畜糞などを混合して熟成させた、所謂混合肥料であると考えられる。

ワグナー『農書』ではこれを塗り固めた寫眞も掲載されているので、<sup>(61)</sup>かなり固いものであったと思われるのである。それ故、われわれは『纂要』の「糞」を、「踏糞」をも材料としたであろう堆肥と見ておきたい。こう見れば、米田賢次郎氏が漢代に既に見られると指摘された「土糞」が、<sup>(62)</sup>引き續き且つ廣汎に使用されていると理解できるのである。

かかる堆肥について、唐代の使用・製造狀況をいさ少し検討しておこう。作者未詳の『東陽夜怪錄』



では、主人公（成自處）が通り過ぎた莊園の様子を次のように描寫している。

……繞りて村の北道に出づ。左に柴欄の舊園を經、一牛の雪に踏して草を齧むを覩たり。此に次ぐこと百餘歩ならず、合村悉く糞を輦び、此に幸きて蘊崇するあり。自處其の下を過ぐるに群犬喧吠す。<sup>(63)</sup>云々

ここには、莊園の一部に堆肥の製造所があったことが描かれている。そこに「合村」つまり村中の人々が「糞」を運んで來るのだという。この状況からすれば、ここにいう村人とは何らかの形で莊園に關わりを持つ人、即ち小作人、或いは莊客達であつたと考えられる。彼らは莊園主の耕地で使用するための堆肥を製造していたのである。

これと同じように、大規模な堆肥が存在した話として「章訓」の話がある。そこでは、章訓を脅かした「鬼」が「大糞堆」の中に走り入つたため、「村人」を率いて數尺も掘つたところ、「鬼」と同じ服裝の「新婦子」<sup>(64)</sup>が出てきた、というのである。ここに登場する「大糞堆」も亦、前話と同じく「村人」達が關わる大規模な堆肥だつたと見られる。このように、堆肥は莊園などで大規模に製造されることもあつたのである。かくて製造された堆肥は、『纂要』にあつた如く、蔬菜類を中心に施されていた。

ここで附言すれば、唐代では都市の下肥も菜園に利用されていたふしがある。前にもとり上げた「裴老」なる小説では、「除糞」・「除廁人」であつた裴老（實は神仙なのだが）が、長安城南部の大菜園に鄰接して邸宅を構えていたのであつた。<sup>(65)</sup>ここには、下肥を菜園に施す場面などとはもとより描かれていないが、かかる舞臺設定は明らかに下肥と蔬菜栽培との結合を念頭に置いたものである。同様に「剔糞」を業とする長安の富民羅會の話も、<sup>(66)</sup>彼が富民となつた背景に下肥の利用を考えれば、理解がしやすいのである。このように、都市下肥を堆肥としたか否かは措くとしても、その菜園への利用は窺われるのであり、それは近郊の小農民達の施肥にとつても有利な状況であつたと考えられるのである。

かくて、堆肥や下肥は富有な階層のみならず、一般の小農民によつても製造・使用される可能性も出現していたと見ることが出来る。そして、このような、蔬菜を主とする施肥のあり方は『要術』よりも一段と高い水準に到達していたと見

ることができるし、宋の陳旉が述べた多肥農法の前段階が形成されていたとも見ることもできるのである。

以上、本章において検討した三つの要因の他にも、新しい畜力・人力耕具の登場など幾つかの要因があったことは、もはやここに繰り返すまでもないであろう。<sup>(67)</sup>こうして、唐代における蔬菜の生産は飛躍的に發展していったと考えられる。その結果として、「園」「宅」の分離も可能とされるのである。では、このような情勢をふまえて、蔬菜栽培は農業經營の中でどのような位置を占め、また、「園圃業」に攜わる經營はどのように存在していたのであろうか。最後に検討してみよう。

### 三 蔬菜生産と農業經營

蔬菜栽培をめぐる農業經營を考えようとする場合、二つの側面が存在することに、われわれは注意しなければならない。つまり、余華青氏が、秦漢時代の研究で指摘した如き「園圃業」と「穀物種植業」<sup>(68)</sup>との分業がその一である。そしていま一は、小經營内部における蔬菜栽培が持つ意義についてである。本章ではさしあたりこの二側面から考察を進めてゆきたい。

まず「園圃業」即ち蔬菜・果樹等の専門經營について見てゆこう。その際考察の前提として注意しておきたいのは、一般に蔬菜・果樹の栽培に關わる史料の多くが、販賣・流通等貨幣經濟との關連で殘されているという點である。それを端的に述べているのは『要術』の多葵・蔓菁・胡荽などの項目であるが、<sup>(69)</sup>その他の史料でも幾つかの例が見られる。最初にこの點から確認しておこう。

南朝の例では、宋の柳元景の數十畝の菜園で二萬錢の利益があったというし、<sup>(70)</sup>同じく宋の郭原平は瓜作りを業とし、それを錢唐へ運んで販賣していた。<sup>(71)</sup>さらに、一種類の蔬菜のみを扱う「葱肆」なる専門店も存在していた。<sup>(72)</sup>また、隋の張威

は「蘆菔根」を販賣したし、唐の王昶は公廨園の蔬菜を賣って私腹を肥やしたのであった。<sup>(74)</sup>さらに、小説では、幼兒をかかえた老婆が、「宋城南店」で蔬菜を賣りながら生計をたてていた。<sup>(75)</sup>

このような蔬菜の販賣をめぐる話は、宮廷にあっても例外ではなかった。晋の東宮の西園では「葵菜・藍子・鶏・麝の屬」を賣ったことが非難され、<sup>(76)</sup>北魏の太子の宮廷でも蔬菜を栽培して利益を求めていると、非難の対象とされていた。<sup>(77)</sup>また、唐初にも、實行はされなかったが、苑内の「蔬果」を賣り出そうという議論が行なわれていた。<sup>(78)</sup>

このように、民間・宮廷を問わず、蔬菜の販賣は活潑に行なわれていた。このことは、蔬菜類の需要が相當に多く、また、それが安易な収入源ともなっていたことを示している。そして同時に、蔬菜の如き生鮮食品は遠距離輸送が不可能であるにもかかわらず、日常不可欠の食品であるという性格をも背景としているのである。このため、宮廷をはじめ、中書省や州・縣などの官署にも菜園は附置され、<sup>(79)</sup>日々の需要を充たしていたし、逆に、このことは蔬菜類の恒常的な需要の存在をも示唆している。このように見てくれば、都市を中心として「園圃業」が發展していったであろうこと言うまでもない。そして、唐代までの都市の發展は、かかる「園圃業」の伸長を支えていたのである。

ところで、唐代における「園圃業」には、大規模なものも零細なものも、共に存在していた。小説では、前掲の裴明禮の如き大農法による大規模な果樹栽培の例も見られるが、<sup>(80)</sup>他方、零細な經營も目につく。例えば、滑州で「灌園」を業とする老夫婦は娘を一人持っただけだったし、<sup>(81)</sup>「宋城南店」の老婆は、女兒をかかえて一人で生計を立てていたのであった。<sup>(82)</sup>小説の他にも零細な經營の例はある。張允濟の助けた老婆は、一人小屋を作り葱を盜難から守っていた。<sup>(83)</sup>さらに、五代の洛陽では、唐末の破壊以後復興が進められていたが、そこで蔬菜栽培業を営んでいたのは、多くが「貧賈」な者であったという。<sup>(84)</sup>

このように、唐代の「園圃業」では大規模な經營も零細な經營も共に成立していたが、殊に後者の存在に歴史的意味を見出すことができるであろう。それは、前章に述べた蔬菜生産力の發展が、特に後者の如き經營において意味を持ったと

考えられるからである。つまり、栽培品種の増加は、時期や氣候に合った作物をきめ細かく選擇することを可能とし、栽培技術の發達は、單位當り收量の増大をもたらした。また、當時の肥料供給水準から考えれば、丹念な施肥の實現には小規模經營が有利であつたろう。さらに、前章では觸れなかったが、華北の蔬菜栽培にとって灌水を重要な條件とする作物がかなりあつた。そして「灌園」という語が蔬菜栽培を意味する如く、蔬菜と水とは切り離せない組合せのように見られていた。この灌水は多くの場合井戸が利用され、従つて人力による汲み上げと丁寧な灌水が求められた。

このように見てくるならば、蔬菜生産においては、大農法的經營が有利とは必ずしも言えない狀況が展開していたと考えられる。人力耕を主體とする小農法的經營も、集約的農法を追求することによって、高い生産力を確保することは十分可能となつていた。その上、都市近郊の如く恆常的な需要が存在し、交換經濟が活潑であればなおさら、小農法的經營の再生産は保障されたのである。かくて、都市近郊をはじめとして、零細經營をも含んだ「園圃業」が廣汎に成立していたのであつた。われわれはここに、唐代の生産力發展の一つの成果を見出すことができるのである。

次に、主穀作を主體とする一般の小經營について考えよう。ここでは蔬菜類栽培はどのように位置づけられていたであらうか。この點、第一章に見たように、經營内に菜園が存在したことは確認でき、それが都市部をはじめとして、分離される傾向にあつたことも豫測できたわけである。しかし、かかる分離のより具體的なあり方を把握しようとする時、われわれは史料的な困難にゆき當るのである。そこで、唐代におけるかかる動きの結果を、宋代の若干の例から考えておきたい。そして、その方向性について確認したいのである。

さて、宋代における先進的な農業經營のあり方を簡潔に述べているのは、やはり陳旉『農書』であらう。ではここでは蔬菜類栽培はどのように扱われているであらうか。

蔬菜に關しては卷上の四箇所で言及<sup>(85)</sup>されている。まず、堤防などを作つた場合、その「欹斜坡陁の處」つまり傾斜地を利用して蔬菜を栽培するよう述べられる。無駄な土地を無くそうというのである。次に、早稻を收穫した後の田をも蔬菜

栽培に使うべきだとする<sup>(86)</sup>。そのことによって次年度の耕地手入れの手間を省くことができ、家計の足しにもなるという。そして、さらに「場」(脱穀・乾燥などに使う廣場)を使わない期間には、これを菜園として利用することも述べられている<sup>(87)</sup>。一方、より具體的な作物として「蘿蔔・苾菜」があげられ、それは五月以降耕起・施肥を十分に行なった畑に植えるよう勧められていた<sup>(88)</sup>。これは、諸種の作物を間斷なく栽培することによって、食料缺乏の狀態に至らないようにとの配慮にもとづくものであった。

ここに見る如く、陳旉の考え方では、蔬菜栽培は、閒隙の地を有効に利用する場合と、窮乏を防ぐためとは言え、かなり力を入れて栽培する場合の二つの條件の下で位置附けられていた。しかし、唐以前の「園宅地」におけるような、常時蔬菜類を栽培している菜園については言及されていないのである。それは恐らく、より效率的な耕地(例えば稻作など)として組み込まれてしまっているのであろう。陳旉のねらいはあくまで主穀類に置かれていたのである。そして、このような主穀類優先の經營方針は、一般の小農民經營でも徐々に普及していただろうし、それだけ蔬菜栽培の位置附けは低下していったと考えられる。

とすれば、陳旉ほどの効率を考えない農民や、耕地に餘裕のない農民は蔬菜栽培からは遠ざかることになり、必然的に蔬菜類は購入に頼ることとなるであろう。北宋初期の人張詠が鄂州崇陽縣の知事だった時、縣城へ蔬菜を買いに來た農民を追い返し、各自蔬菜を作るよう指導したという話は<sup>(89)</sup>、このような農民の蔬菜購入という動きを示唆するものである。ここに唐代以降の農業經營における蔬菜栽培の位置が表明されているのである。

かくて小經營は貨幣經濟と結合し、逆にそのことは蔬菜栽培の分離を可能とする土臺を一層強化しつつあった。その結果、五代には都市内の菜園が課税の對象となり、さらに南宋では「菜園戸」への課税が具體化されることとなる<sup>(90)</sup>。

ともあれ、貨幣經濟の發展と併行して蔬菜栽培の分離及び専門化が一層進んでいた。この専門化は以後、さらに固定化したようである。今世紀のJ・L・バックの調査・研究<sup>(92)</sup>、或いは滿鐵の調査でも、蔬菜栽培と主穀類栽培の全くの分離、

専門化という事實が指摘されているのである。

以上に見てきた如く、唐代の蔬菜栽培に關する經營をめぐるは二つの側面があつた。即ち、一方では蔬菜栽培の専門經營が幅廣く成立し、もう一方では、小經營内の蔬菜栽培に關わる部分が切り離されつつあつた。そしてこれら二側面の動きは、共に貨幣經濟の發展と密接に結びついていたのである。

### おわりに

以上、管見の限りで唐代の蔬菜生産に關わる諸側面を考察してきた。そこでは、主穀類と同様に、あるいはそれ以上に蔬菜類の生産力が發展していたことを確認できたわけである。そしてこの基盤の上で蔬菜生産の形態も變化し、一方では専門化が一層進行していた。それは唐代に殊に顯著となつた都市の發展、貨幣經濟の發展と切り離しては考えられない狀況なのである。

ここに見られる小經營と貨幣經濟との結合は、以後一段と緊密になつてゆくのであり、われわれが中國における小經營の發展及びその特質をとらえようとする際、十分考慮してゆくことが必要となる。ただ、これらの點を考えるためには、われわれは宋代以降の生産力及び經營の發展について一層研究を深めねばならないであらう。今後の新たな機會を待ちたいと考える次第である。

### 註

(1) 拙稿(a)「唐宋變革期の歴史的意義」(『歴史評論』三五七

號、一九八〇年)、(b)「唐代華北の主穀生産と經營」(『史林』六四卷二號、一九八一年)、(c)「唐代江南の水稲作と經營」(中

國史研究會編『中國史像の再構成 國家と農民』文理閣、一九八三年、參照。

(2) 前掲『中國史像の再構成』第一部總論參照。

(3) 小説類を史料として用いる際に考慮すべき點については拙

稿(d)「唐代後半期の農民諸階層と土地所有―小説史料を中心―」(『東洋史研究』三六卷二號、一九七七年、参照。以下の小説類の引用もこれに倣っている。

- (4) 例えば牡丹などが植えられている。『太平廣記』(以下『廣記』と略稱) 卷一九九所引『雲溪友議』 杜牧

唐白居易初爲杭州刺史、令訪牡丹花、獨開元寺僧惠澄、近於京師得之、始植於庭、欄門甚密、他處未之有也、……

- (5) 『廣記』卷四三七所引『述異記』 石玄度

宋元徽中、……其家人養狗、與客食之、投骨於地、大母輒銜置屋中、食畢、乃移入後園中一桑樹下、爬土埋之、……

- (6) 同卷四二八所引『廣異記』 勸自勵

……憤恨莫已、遂持巾、於宅後桑林自縊、爲虎所取、……

- (7) 同卷一四二所引『朝野僉載』 張鷟

又鷟故宅有一桑、高四五丈、無故枯死、尋而祖亡歿、……

- (8) 例えば、同卷四三三所引『原化記』「南陽土人」では、虎になつた人間の話の中に、

……遂轉爲害物之心、忽尋樹上、見一採桑婦人、草間望之、又私度、吾聞虎皆食人、試攫之、果獲焉、食之、果覺甘美、……

とあり、樹に登つて桑を摘んでいる。

- (9) 同卷四七七所引『酉陽雜俎』 白蜂窠

白蜂窠、段成式修行里私第、果園數畝、……

- (10) 同卷四一七所引『宣室志』 梁生

唐興平之西、有梁生別墅、其後園有梨樹十餘株、……

- (11) 同卷四五〇所引『廣異記』 唐參軍

唐洛陽思恭里、有唐參軍者、……久之、園中櫻桃熟、唐氏夫妻暇日檢行、忽見(趙)門福在櫻桃樹上、採櫻桃食之、……

- (12) 同卷四四〇所引『稽神錄』 蘇長史

……蘇怒、持杖逐之、皆走入宅後竹林中而沒、即掘之、獲白鼠三十餘頭、宅不復凶、

- (13) 『兩京新記』 集本卷二 東京

(嘉慶坊) 東都嘉慶坊有李樹、其實甘鮮、爲京都之美、故稱嘉慶李、……

(崇讓坊) 此坊出大竹及桃、諸坊即細小、

(陸仁坊) 坊內出柿實、俗稱陸仁之柿、嘉慶之李、

- (14) 『廣記』卷八一所引『洛陽伽藍記』 趙逸

後魏崇義里有杜子休宅、……時園中果菜豐蔚、林木扶疎、乃服(趙)逸言、號爲聖人、子休遂捨宅爲靈應寺、……

- (15) 『搜神後記』(『增補津逮秘書』) 卷八

新野趙貞家園中種葱、未經抽拔、忽一日盡縮入地、後經歲餘、貞之兄弟相次分散、

- (16) 『酉陽雜俎』 前集卷四 物草

婺州僧清簡家園蔓菁、忽變爲蓮、

- (17) 『廣記』卷二五〇所引『啓顏錄』 鄧玄挺

唐鄧玄挺入寺行香、與諸僧詣園、觀植蔬、見水車以木桶相連、汲於井中、……

- (18) 同卷二四三所引『乾闥子』 竇父

又李晟太尉宅前、有一小宅、相傳凶甚、直二百十千、又買之、築園打牆、拆其瓦木、各梁一處、就耕之術、太尉宅中傍其地有小樓、常不瞰焉、晟欲併之爲擊毬之所、……

\* 『唐南京城坊攷』卷三所引『乾臞子』欠術字、  
(19) 例えば、同卷三六四所引『宣室志』『僧法長』に

……乃白氣、高六七尺、……至里民王氏家、遂突入焉、長駐馬伺之、頃之、忽聞其家呼曰、車字下牛將死、可偕來視之、又頃、聞呼後舍驢蹶仆地、不可救、……而其家十餘人皆死、雞犬無存焉、

とあり、王氏の家には牛・驢・雞・犬が飼われていた。

(20) 『周書』卷二三 蘇綽傳

又爲六條詔書、奏施行之、……其三、盡地利、曰、……三農之隙、及陰雨之暇、又當教民種桑・植果、藝其菜蔬、脩其園圃、畜育雞豚、以備生生之資、以供養老之具、

(21) 『廣記』卷三四二所引『乾臞子』

……移其宅於崇義里、……時柳生尙居金城里、崔氏又使輕紅與柳生爲期、兼資看園堅、令積糞堆、與宅垣齊、崔氏女遂與輕紅躡之、同詣柳生、……

(22) 同卷一二五所引『博異記』

……奔走七八里、至人家、雨定、月微明、遂入其家、中門外有小廳、……俄而白刃夫出廳東、先是、有糞積、可乘而覘宅中、……

(23) 同卷三六九所引『廣異記』

……其婢求術者、行魘蠱之法、以符埋李氏宅糞土中、……其後半歲、果獲六枚、悉焚之、唯一枚得而復逸、逐之、忽乃入糞土中、蘇氏率百餘人掘糞、深七八尺、得桃符、……

(24) 前掲註(3) 拙稿(d)參照。

(25) 曾我部靜雄氏「均田法の園宅地について」『史林』四〇卷

二號、一九五七年、後『中國律令史の研究』所收、土肥義和氏「唐代敦煌の居住園宅について」、『國學院雜誌』七七卷三號、一九七六年。なお小論では所謂「敦煌文書」等に言及することができないので、小論の視角にそって論じている。従って個々の論點の異同については別の機會に述べてみたいと考える。また田令については仁井田陞氏『唐令拾遺』參照。

(26) 『魏書』卷一一〇 食貨志

(太和)九年、下詔均給天下民田、……諸民有新居者、三口給地一畝、以爲居室、奴婢五口給一畝、男女十五以上、因其地分、口課種菜五分畝之一、

(27) 『隋書』卷二四 食貨志

後周太祖作相、創制六官、……司均掌田里之政令、凡人口十已上、宅五畝、口九已上、宅四畝、口五已下、宅三畝、

(28) 同前

及頒新令、……其園宅、率三口給一畝、奴婢則五口給一畝、

(29) 『唐六典』卷三 戶部郎中員外郎

凡天下百姓、給園宅地者、良口三人已上給一畝、三口加一畝、賤口五人給一畝、五口加一畝、其口分・永業不與焉、

若京城及州縣郭下園宅、不在此例、

(30) 『梁書』卷二一 張充傳

因與(王)儉書曰、……半頃之田、足以輸稅、五畝之宅、樹以桑麻、

(31) 『孟子』梁惠王章句上

五畝之宅、樹之以桑、五十者可以衣帛矣、  
同じ表現は「盡心章句上」にもある。



(32) 仁井田氏前揭註(25)、及び、内藤乾吉氏「唐六典の行用に就いて」(『中國法制史考證』所收)等参照。

(33) 『冊府元龜』卷一四一 帝王部念良臣

憲宗元和四年、覽貞觀故事、見侍中魏徵諫諍匪躬、詔令京兆尹訪其子孫及故居、其居在永興坊、已質賣、更無魏姓、折爲九家矣、……

(34) 前揭註(18)の前半部

先是、西市秤行之南、有十餘畝坵下潛汙之地、目曰小海池、爲旗亭之內、衆穢所聚、又遂求買之、……所擲瓦已滿池矣、遂經度、造店二十間、當其要害、日收利數千、甚獲其要、店今存焉、號爲賣家店、

(35) 「略論秦漢時期的園圃業」(『歷史研究』一九八三年三期)。

(36) 『長安志』卷七 開明坊

自朱雀門南、第六橫街以南、率無居人第宅(註)自興善寺以南四坊、東西盡郭、雖時有居者、煙火不接、耕藝種植、阡陌相連、

(37) 『廣記』卷四二所引『逸史』裴老

唐大曆中、有王員外、好道術、……會除溷裴老、攜織具至王君給使、因聞諸客言、竊笑之、王君僕使皆怪、……妻呼曰、安有與除溷人親狎如此、王君曰、尚懼不肯顧我、……乃約更三日、於蘭陵坊西大菜園後相覓、王君亦復及期往、至則果見小門、扣之、黃頭奴出問曰、……

(38) 『二老堂雜志』卷四

車駕行在臨安、諺云、東門菜、西門水、南門柴、北門米、蓋東門絕無民居、彌望皆菜園、

(39) 『廣記』卷二四三所引『御史臺記』裴明禮

……又於金光門外、市不毛地、多瓦礫、……乃舍諸牧羊者、糞既積、預聚雜果核、具犂牛以耕之、歲餘滋茂、連車而鬻、所收復致巨萬、乃繕甲第、周院置蜂房、以營蜜、廣栽蜀葵、雜花果、蜂採花逸而蜜豐矣、……

(40) 『柳河東集』(中華書局)卷一七 種樹郭橐駝傳

……橐駝種樹、凡長安豪富人、爲觀游及賣果者、皆爭迎取養、視橐駝所種樹、或移徙、無不活、且碩茂、實以蕃、……

(41) 『廣記』卷一六〇所引『玉堂閑話』灌園嬰女

……卜人曰、在滑州郭之南、其姓某氏、父母見灌園爲業、只生一女、當爲君嘉偶、……遂詣滑質其事、至則於滑郭之南尋訪、果有一蔬圃、問老圃姓氏、與卜人同、又問有息否、則曰、生一女、始二歲矣、……

(42) 同卷三五所引『會昌解頤錄』韋丹

……往徐州、……召一衙吏問之曰、此州城有黑老、家在何處、其吏曰、此城郭內竝無、去此五里瓜園中、有一人姓陳、黑瘦貧寒、爲人傭作、賃半間茅屋而住、……

(43) 同卷三九五所引『三水小牘』張應

唐張應、自潯陽被命至河內郡、涉九鼎渡、……事畢而還、復渡河、至平陰、天景蕭瑟、憩于園井、就之鹽灌、因與園叟話之、……

(44) 同卷一五九所引『續幽怪錄』定婚店

杜陵韋固、少孤、……貞觀二年、將遊清河、旅次宋城南店、……曰、固妻安在、其家何爲、(老人)曰、此店北賣菜家婦女耳、固曰、可見乎、曰、陳嘗抱之來、賣菜於是、能隨我

行、當示君、及明、所期不至、老人卷書揭囊而行、固逐之入菜市、有眇嫗、抱三歲女來、弊陋亦甚、……妻潛然曰、……時妾在襁褓、母兄次沒、唯一莊在宋城南、與乳母陳氏居、去店近、鬻蔬以給朝夕、……

(45) 『料理の起源』 8 果物と蔬菜、参照。

(46) 蕪菁・蔓菁などをカブ、蘆服・蘿蔔・萊服などをダイコンと譯すことはほぼ問題がないが、菰についてはかなり多くの和名があてられている(青葉高氏『日本の野菜』葉菜類・根菜類、参照)。ツケナ・トウナ・ウキナ・ハクサイなどがそれであるが、ここではツケナとして統一しておく。

(47) 『方言』(四部叢刊) 卷三

蕪・蕪、蕪菁也、陳・楚之郊、謂之蕪、魯・齊之郊、謂之蕪、關之東西、謂之蕪菁、趙・魏之郊、謂之大芥、其小者謂辛芥、或謂之幽芥、其紫華者、謂之蘆服、東魯謂之菰蕪、

(48) 同前

(蕪註) 舊音蜂、今江東音崇、字作菰也、(蘆服註) 今江東名爲溫菰、實如小豆、

(49) 『爾雅』釋草

(菰、蘆肥註) 萑宜爲菰、蘆服、蕪菁屬、紫華大根、俗呼菰菜、

(50) 『唐・新修本草』輯復本卷一八蕪菁及蘆服の項

蘆服是今溫菰、其根可食、葉不中噉、蕪菁根乃細於溫菰、而葉似菰、好食、

(51) 『要術』卷三 蔓菁

種菰・蘆服法、與蔓菁同(註)……案蘆服根實粗大、其角及

根・葉、並可生食、非蕪菁也、

(52) 『唐・新修本草』卷一八 蕪菁及蘆服

謹案、蕪菁、北人又名蔓菁、根・葉及子乃是菰類、與蘆服全別、至於體用亦殊、今言蕪菁子似蘆服、或謂蘆服葉不堪食、兼言小蠹體、是江表不產二物、斟酌注銘、理喪其眞耳、

(53) 『隋書』卷五五 張威傳

威在青州、頗治產業、遣家奴於民間竊蘆服根、其奴緣此侵擾百姓、上深加譴責、坐廢於家、

(54) 『通典』卷二 食貨屯田

大唐開元二十五年令、……諸營田、若五十頃外、更有地剩配丁牛者、所收斛斗、皆準頃畝折除、其大麥・蕎麥・乾蘿蔔等、準粟計折斛斗、以定等級、

(55) 『廣記』卷二五五所引『御史臺記』賈言忠

……時義云、裏行及試員外者、爲合口椒、最有毒、監察爲開口椒、毒微歇、殿中爲蘿蔔、亦曰生薑、雖辛辣而不爲患、……

(56) 『唐・新修本草』卷一八 菰

謹案、菰菜不生北土、有人將子北種、初一年、半爲蕪菁、二年、菰種都絕、將蕪菁子南種、亦二年都變、土地所宜、頗有此例、

(57) 『重修政和經史證類備用本草』卷二七菰菜所引『食療本草』

又北無菰菜、南無蕪菁、其蔓菁子細、菜子角也、

(58) 同前所引『圖經本草』

菰舊不載所出州土、今南北皆有之、與蕪菁相類、……而今京都種菰、都類南種、但肥厚差不及耳、

(59) 前揭註(1)拙稿(b)参照。

(60) 「蒜」を例にとると、『纂要』の「蒜」についての記述は次のようになっている。

〔正月〕 雜種、是月、種……蒜……之類、

〔二月〕 擇蒜、條牽者擇之、否則獨顆而黃、中旬鋤三遍、無

草亦鋤、

〔六月〕 雜事、……種小蒜・蘿蔔、

〔七月〕 雜事、是月也、……種小蒜・蜀芥、

〔八月〕 種蒜、良歇地耕三遍、以糠糲、逐壟下之、五寸一

株、二月半、鋤之、滿三遍止、無草亦須鋤、不鋤即不作糞

作行、上糞、水澆之、一年後、看稀稠更移、苗魚如大筋、三

月中、即折頭、上糞、當年如雞子、早即澆、年年須作糞次

種、不可令絕矣、

この中、『要術』の抄録と思われるのは傍線部分のみである。

従つて(II)に分類される。

(61) 『中國農書』(高山洋吉譯) 下卷、五七—九頁。

(62) 「中國古代の肥料について」(滋賀大學學藝學部紀要) 一

三號、一九六三年。

(63) 『廣記』卷四九〇所引

……繞出村之北道、左經柴欄舊園、觀一牛踏雪乾草、次此不

百餘步、合村悉盡糞、幸此蘊崇、(成)自虛過其下、群犬喧

吠、……自虛驅馬久之、值一叟、關荆扉、晨興開徑雪、自虛

駐馬訊焉、對曰、此故友右軍彭特進莊也、……

(64) 同卷三八所引『廣異記』章訓

……先生被曳至一家、人隨而呼之、乃免、其鬼走入大糞堆中、

率村人掘糞堆中、深數尺、乃得一緋裙白衫破帛新婦子、焚於

五達衢、其怪遂絕焉、

(65) 前掲、註(37)。

(66) 『廣記』卷二四三所引『朝野僉載』羅會

長安富民羅會、以剔糞自業、里中謂之雞肆、言若歸之積糞而

有所得也、會世副其業、家財巨萬、……

\* 『朝野僉載』(中華書局) 卷三、積字作因剔二字、

(67) 天野元之助氏『中國農業史研究』增補版第三篇第二章スキ

の發達、前掲註(1) 拙稿(a)(c)等参照。

(68) 前掲、註(35)。

(69) そこでは、「近州郡都邑、有市之處」(多葵)とか「近市良

田」(蔓菁)、「近市負郭田」(胡葵)などの條件を設定して栽培

法が述べられている。

(70) 『宋書』卷七七 柳元景傳

時在朝勳要、多事產業、唯元景獨無所營、南岸有數十畝菜

園、守園人賣得錢二萬、送還宅、……

(71) 同卷九一 郭世道傳附原平傳

又以種瓜爲業、世祖大明七年、大旱、瓜瀆不復通船、……乃

步從他道往錢唐貨賣、

(72) 『梁書』卷一一 呂僧珍傳

從父兄子先以販葱爲業、僧珍既至、乃棄業欲求州官、僧珍

曰、吾荷國重恩、無以報效、汝等自有常分、豈可妄求叨越、

但當速反葱肆耳、

(73) 前掲、註(53)。

(74) 『舊唐書』卷一一八 元載傳附王昂傳

性貪吝、無愧苟得、乃竊公廩園菜、收其錢以潤屋、甚爲時論所醜、

(75) 前掲、註(44)。

(76) 『晉書』卷五六 江統傳

統上書諫曰、……其四曰、……今西園賣葵菜・藍子・鷄・麴之屬、虧敗國體、貶損令問、

(77) 『南齊書』卷五七 魏虜傳

……僞太子宮在城東、亦開四門、瓦屋、四角起樓、妃妾住皆土屋、婢使千餘人、織綾錦販賣、酤酒、養猪羊、牧牛馬、種麥逐利、

(78) 『資治通鑑』卷二〇四 垂拱三年四月の條

時尚方監裴匪躬檢校京苑、將竊苑中蔬菜、以收其利、中書省については、『舊唐書』卷一四九奚陟傳に

貞元八年、擢拜中書舍人、……又躬親庶務、下至園蔬、皆悉自點閱、人以爲難、陟處之無倦、

とあり、州については『唐大詔令集』卷二「穆宗即位赦」に

諸州府除京兆・河南府外、應官莊宅・鋪店・碾磑・茶・菜園・鹽畦・車坊等、宜割屬所管官府、

とあることから窺われる。また、縣については、『廣記』卷三九所引『逸史』「劉晏」に、

……劉公異之、告郵史曰、側近莫有衣冠居否、此菜何所得、答曰、縣有官園子王十八能種、所以館中常有此蔬菜、……とあり、縣にも菜園があつて、官園子と呼ばれる耕作者が働いていたことがわかる。

(80) 前掲、註(39)。

(81) 前掲、註(41)。

(82) 前掲、註(44)。

(83) 『舊唐書』卷一八五上 張允濟傳

又嘗道逢一老母種葱者、結菴守之、允濟謂母曰、但歸、不煩守也、若遇盜、當來告令、老母如其言、居一宿而葱大失、……

(84) 『冊府元龜』卷一四 帝王部都邑

(長興二年六月) 其月、河南府奏、准敕、京城坊市人戶菜園、許人收買、切慮、本主占佃年多、以竊蔬爲業、固多貧窶、豈辦盡造、恐資有力、轉傷貧民、

(85) 卷上 地勢之宜篇

……其下地易以渰浸、必視其水勢衝突趨向之處、高大圩岸、環遶之、其欲斜坡陞之處、可種蔬茹・麻・麥・粟・豆、兩傍亦可種桑牧牛、……

(86) 同 耕耨之宜篇

早田穫刈纔畢、隨即耕治噉暴、加糞壅培、而種豆・麥・蔬茹、因以熟土壤、而肥沃之、以省來歲功役、且其收足、又以助歲計也、

(87) 同 居處之宜篇

治場爲園、以種蔬茹、詩所謂疆場有瓜是也、又牆下植桑、以便育蠶、古人治生之理、可謂曲盡矣、至九月、築圍爲場、十月而納禾稼、則歲事畢矣、

(88) 同 六種之宜篇

五月治地、唯要深熟、於五更承露、鉏之五七徧、卽土壤滋潤、累加糞壅、又復鉏轉、七夕已後、種蘿蔔・菘菜、卽科大而肥美也、

## (89) 『夢溪筆談』補筆談卷二 官政

忠定張尙書、曾令鄂州崇陽縣……民有入市買菜者、公召諭之曰、邑居之民、無地種植、且有他業、買菜可也、汝村民皆有土田、何不自種、而費錢買菜、答而遣之、自後人家皆置圃、至今謂蘆販爲張知縣菜、

## (90) 『冊府元龜』卷四九一 邦計部蠲復

〔同光〕二年二月甲子朔、詔曰、……都城內店宅園圃、比來無稅、頃因僞命、遂有配徵、後來原將所徵物色、添助軍人衣賜、將令通濟、宜示矜憫、

## (91) 『宋會要輯稿』食貨七〇 賦稅雜錄

〔紹興〕九年五月十四日、宗正少卿・三京淮北宣諭方廷實言、人戶苗稅、在法係隨地色高下納租、即無專立菜園戶法、欲乞改正、依稅法、隨田高下納苗稅、詔割與逐路轉運司、依祖宗舊制、措置施行、

## (92) 『支那の農業』（鹽谷安夫氏等譯）四八八頁。

(93) 南滿洲鐵道株式會社天津事務所調查課『山東河北兩省に於ける蔬菜事情』七九頁。なお、本書は吉田滋一氏に教示して頂いた。記して謝意を表したい。

## VEGETABLE PRODUCTION AND ORGANIZATION UNDER THE TANG DYNASTY

OSAWA Masaaki

In this article I am dealing with the developmental stages of vegetable cultivation techniques under the Tang dynasty (sorts of produce, fertilizing and supervising techniques, kinds of fertilizer, etc.) as well as with the analysis of the historical peculiarities of related agricultural organization.

The following points have become clear :

1. As one phenomenon related to vegetable cultivation the development of suburban agriculture can be confirmed. This was supported by the pre-Tang tendency to separate the residences in the cities from the vegetable gardens. In addition, an increase and improvement of the variety of vegetables as well as technical progress in the use of compost as fertilizer contributed considerably to the development of this suburban agriculture.
2. Considering the structural organization of agriculture, we find an increasing specialization on a grand scale in the suburbs of the cities. On the other hand, an organization according to small units of petty farmers could also be maintained. In the farming villages, a strong tendency towards specialization in either grain or vegetables is to be noted, especially as it can be seen in connection with the introduction of monetary economy to the villages.

## ETHER'S FORCE OF DESTINY VERSUS THE TREND OF EVENTS — on Zhu Xi 朱熹's understanding of history

MIURA Kunio

That history moves on down in the repetitive pattern of order and chaos constitutes the general framework of Zhu Xi's understanding of